平太郎伝の展開

――浄瑠璃を中心として――

沙加戸弘

はじめに

真宗関係浄瑠璃において平太郎伝は、当然の事ながら親鸞伝、七高僧伝と並ぶ中心的素材であった。しかし、それはいつもというわけではなく、時代と共に大きな変化を見せている。

本稿では、浄瑠璃における平太郎伝展開の概略を述べ、特に延宝期の平太郎伝浄瑠璃『熊野権現開帳』に焦点をあてて、その位置づけを試みたいと思う。

一　浄瑠璃以前の平太郎伝

平太郎伝として年次の明らかな最初のものは、言うまでもなく永仁三年（一二九五年）親鸞の曾孫覚如によって著された『善信聖人絵』（以下『絵伝』と略称する）である。周知の如くこの中には、念仏の行者常陸国那荷西郡大部郷の平太郎が、公務に従い熊野に参詣することとなり、京都に親鸞をたずねて、「しかれば、本地の誓願を信じて一向に念仏をこととせん輩、公務にもしたがい、領主にも駈仕して、其の霊地をふみ、その社廟に詣せんこと、更に自心の発起するところにあらず。しかれば垂跡におきて、内懐虚仮の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀を標すべからず、唯本地の誓約にまかすべし」との教化を蒙り、不浄をもかいつくろうことなく熊野に参詣し、夢中に権現の指弾を受けたが、突然あらわれた親鸞の「彼は善信が訓によりて念仏する者なり」という一言により事なきを得た。参詣がすんで再び京都の親鸞のもとへ参じ、次第を報告したところ

親鸞は「其の事なり」とだけ答えた、という説話が収められている。

いま一つ見逃すことのできない平太郎伝は、宮崎円遵博士によって、「『伝絵』よりも早く成立したものかと思われるが、少なくとも『伝絵』所伝とは別系統の異なったところに流布していたものといわねばならない。[1]」と考証された『親鸞聖人御因縁』中の「真仏因縁」である。この『親鸞聖人御因縁』中の「真仏因縁」は、大略次のようなものである。

常陸横曾根の田夫平太郎は、領主佐竹刑部左衛門末方の年籠りの熊野参詣に、夫役として召された。平太郎は親鸞の教えによって念仏の行者となっていたが、「これはちからおよはぬ主命なれば」と熊野へ参詣する。道中において彼は、飢餓に苦しむ者に飯を分け、精進潔斎もせず、あまつさえ浜辺に漂着した死骸を夜陰に紛れて葬った。さて熊野に参着し、佐竹末方を始め一千七百二十三人の者が年籠りの通夜をした。その夜、通夜の人々全てが、証誠殿をはじめ諸神が姿をあらわし平太郎を拝した、という夢を見た。精進もせぬいやしき者を拝するとは何事か、と佐竹末方が立腹して問うと、限ある生命を永かれと願い、得られぬ富を欲することが我等の苦しみとなる。平太郎の念仏によりその苦しみを脱することができた。その報恩のため礼拝するのである。平太郎こそ真の仏である、と神勅があって人々の夢がさめた。そこで諸人感嘆し、先達の山伏は平太郎の弟子となった。さらに権現の示現にまかせて、平太郎は真仏房と称され、佐竹末方と共に京都に上った。真仏房は道中で人々を勧進すること二万八千人に及び、弘長元年正月二十一日に亀山天皇より上人に補せられたが、親鸞在世の間は我は上人とは呼ばれじと、再び常陸へ下ったので、相承はいよいよ固いものとなり、今に親鸞・真仏と称されている、[2]というものである。

この二つの平太郎伝は、後々の全ての平太郎伝に、多かれ少かれ影響を及ぼしている。特に後者は、「領主佐竹刑部左衛門末方」、あるいは「年越の夜」という『絵伝』にはない設定があり、これが真宗道場の節分の行事「平太郎讃談」（「平太郎殿」）の基となったことはほぼ疑いがない。

近世広く行われていた「平太郎讃談」の行事は、元禄五年（一六八六年）正月刊行の『世間胸算用』に西鶴が、

毎年節分の夜は門徒寺に定まって平太郎殿の事讃談せらるゝなり、聞たびに替らぬ事ながら殊勝なる義なれば老若男女ともに参詣多し[3]（巻五ノ三「平太郎殿」）

と記していることによってその隆盛が知られよう。今日ま

で伝えられている「平太郎讃談」の行事[4]も、やはり正月から節分にかけて行われる。いずれも『平太郎御伝』等と称されている平太郎伝の拝読に、内容の関連する説教を伴っている。西鶴も「聞たびに替らぬ事ながら」と記しているので、テキストがあったことが知られ、形態上大きな隔絶はないであろう。「明治末年頃までは終夜の讃談であった。」とは、今も「平太郎讃談」を伝える老住職の談である。伝わる『平太郎御伝』の書写年代は、本により違っているが、いずれも近世中期までは遡ることができる。その内容は、まさしく『絵伝』の平太郎伝と『親鸞聖人御因縁』中の「真仏因縁」とを、ほとんど文章もそのまま併せた形になっている。また、近世に著された真宗門徒による多くの平太郎伝も、基本的にはこの二つの平太郎伝に依っている。つまり、『絵伝』と『親鸞聖人御因縁』中の「真仏因縁」とを併せた平太郎伝――常陸の田夫平太郎が、領主の命によって熊野へ参詣することとなり、親鸞の教化を蒙り、精進せず念仏して熊野参詣をし、権現が念仏の声を聞くのはうれしいと平太郎を拝した――が、近世における真宗道場での平太郎伝であったと考えられるのである。

二　寛文期までの真宗関係浄瑠璃における平太郎伝

さて、前述のような平太郎伝は、寛永以後の真宗関係浄瑠璃にとり入れられ、時代の流れと共に大きな変化を見せることとなる。

最初にとり入れられたのは、真宗関係浄瑠璃の嚆矢、寛永古活字版の『しんらんき』[5]である。六段目に語られる平太郎伝は、

さてもそのゝち、こゝにまたひたちの国には、さたけのぎやうぶさへもん殿、まひ年くま野まふてなされしか、とう年もまた、をんまいりあらんとて、くりもとほう、しやうしんほうゐんを、せん立にたのませ給ひ、くまのまふてと聞えける、三つの御山になりしかは、さたけとのをはしめとして、一千七百四人の、御ともの人々、其よは御山にこもられける、さればやはんばかりの事なるに、ふしきなるかな、御内しんのかたよりも、こんぢきのひかりかゝやきけると、おの〳〵をかまれ申所に、思ひの外にひきかゑて、はるかはつざに候ひける、よこそねの平太郎に、らいはひあつて、こんけん御ないぢんに入給ふ

とはじまり、以下『親鸞聖人御因縁』の「真仏因縁」そのままに展開する。言わば、真宗道場における平太郎伝をそっくりそのままとり入れた形を示しているのである。この『しんらんき』は、寛文三年（一六六三年）に整版本として再び刊行される。[6]

ところが、寛文六年（一六六六年）十一月、八文字屋八左衛門によって刊行された伊藤出羽掾正本『よこぞねの平太郎』[7]は、やや趣を異にしている。平太郎は、

こゝに本てう八十五代ごさがのゐんの。ぎように。かうづけの国の。ちう人、さうま。うきやうのしん。いへかどとて。弓取一人おはします。せんぞを。くわしく。たつぬるに。まさかどのごそん。しだの小太郎に七代のちやくそんなり。うちにはぢひしんふかく。ほかにはぶゆふを。むねとし。こつかゆたかに。おさめたまへは。うらやまさるはなかりけり。御子一人おわします。さうまの平太郎。いゐざねとて、十七さいに。なり給ふ。

と紹介される。「平太郎某といふ庶民」（『絵伝』）あるいは「あやしの田夫」（「真仏因縁」）と伝えられてきた平太郎は、ここで「平　太郎」と読みかえられ、将門の子孫・平氏歴々の領主の子ということになったのである。しかしながらこの『よこぞねの平太郎』は、構造上二曲をくっつけたと言ってさしつかえない程に前半と後半が別れている。すなわち、平太郎の父相馬右京之進と安達禅師盛安とが、碓氷峠において鹿狩競争をした事に端を発する争いの部分と、親鸞をめぐる奇瑞譚の部分である。この二つはこの浄瑠璃のちょうど中間第三段目で、親を討たれ頼みとする家臣にも先立たれた平太郎が、

たのむ方なき我身かな。しょせんうき世をふりすて。ぼだいの道にいらばや。

と思い定めて、

けに誠ひたちの国。いなだに。上人と申奉る。たつときちしきの。ましますよしない〳〵承り及し也ちしきに相奉り。御かみそりをいたゞき。父母の御ぼだいとい奉らん

というところで、かろうじてつながっている。つまり前半は、平太郎を主人公とする浄瑠璃制作上、それまでの平太郎伝で伝えられてない部分、すなわち平太郎が親鸞の教化を受けるまでの前半生を述べる必要があったことに由来している。しかし、『よこぞねの平太郎』においてそれだけの意味しかないことは、この平太郎の前半生が後半に何らの影響も及ぼさず、後半は全く『しんらんき』と同じであ

る、ということで明らかである。従って後半は平太郎伝を含むものの、『よこそねの平太郎』全体が統一のとれた平太郎伝であるとは言い難い。四段目に描かれる平太郎の熊野参詣も、やはり真宗道場における平太郎伝である。平太郎は一人の人夫として、国司佐竹刑部左衛門の年籠りの熊野参詣に従う。この段には、平太郎が平氏歴々の領主の子である、という前半の俤が全くない。権現が平太郎を拝して後、佐竹末方はやはり内陣に向って、

まいねんそれがし。この御山へ。年こもり仕り。しん〳〵まことをはげまし候を。御のうじうもましまさで。誠にあのていなるいやしき物。そのうへしにんを。手にかけけがれたる物に。かくらいはいまし〳〵て。なふしう有こそ口をしけれ。（傍点筆者）

と立腹する。これはまさしく、前述の『しんらんき』の影響下に成立したための矛盾であると言えよう。

このように、『よこぞねの平太郎』の作者によって創造され、その中では武勇を語り、後半の出家に弾みをつける以外に意味を持たなかった「平太郎平氏説」ではあったが、実はこれが、以後の浄瑠璃における平太郎伝の展開に大きな影響を与えることとなるのである。

ところで、この寛文期の浄瑠璃について述べる時、是非ともふれておかねばならない事件がある。それは、寛文十二年（一六七二年）十一月に、東本願寺が浄瑠璃興行および出版における親鸞伝の停止を奉行所に訴え、奉行所がその訴えを認める定を出したことである。このことは、已に諸書に詳しく述べられている[8]ので細部については省略する。

ただ、この結果浄瑠璃興行・出版界は、親鸞伝を建前上表面に出すことができなくなった。事実、寛文十二年以後数年間は、親鸞伝あるいはそれと思しき浄瑠璃は刊行されていないようである。しかし親鸞が観客に受け入れられ易く市場性に富んでいたこと、中に出てくる多くの奇瑞説話が当時流行のからくりに最適であったことなどの理由で、親鸞伝浄瑠璃は延宝期以後、カムフラージュという方法で復活してくる[9]。しかしながら、『他力本願記』（延宝七年・宇治加賀掾正本・鶴屋喜右衛門刊）、『六角堂救世菩薩』（天和初年・山本土佐掾・山本九兵衛刊）、さらには『華和讃親羅源氏』（寛延二年・豊竹座・山本九左衛門刊）と続く親鸞伝浄瑠璃の中に、平太郎伝は見事に欠落している。これは恐らく、カムフラージュという手法上、他の要素の取り込みによって余裕がなくなったこと、あるいは平太郎伝をかみ合せると東本願寺に対する言訳ができ難くなること、等の理由によるものであろう。

では、省かれた方の平太郎伝はどのようになったのであろうか。

三　延宝期の平太郎伝浄瑠璃

浄瑠璃における平太郎伝は、延宝期に大きな展開を遂げ、名実ともに平太郎伝浄瑠璃と呼べるものの出現を見た。つまり、これまでは親鸞伝浄瑠璃中の一奇瑞譚としてしか位置付けられていなかった平太郎伝が、親鸞伝浄瑠璃から省かれたことによって逆に自立し、中心素材となったと考えられるのである。このようにしてでき上った平太郎伝浄瑠璃が、『熊野権現開帳』と『和合之名号』である。

『熊野権現開帳』は現在二本が知られている。一本は東京大学図書館霞亭文庫所蔵のもので、「熊野権現開帳付平太郎きすい物語」の内題を持つ。これは若月保治氏の『古浄瑠璃の研究第二巻』に紹介がある。今一本は天理図書館の蔵本（分類番号九一一・七・イ・一六三・A一一〇五）である。この天理本『熊野権現開帳』と東大本とを比較検討すると、酷似してはいるものの別の正本であることが判明する。内容は後述するが、共に平太郎伝に三十三間堂由来譚をからませたもので、筋の運びは細部に至るまでほとんど同じであり、また写真に示したように、挿絵の多くが明らかに関連を示している。さらに言葉遣いも同一の箇所がしば〳〵出て来る。一部分示してみよう。（傍線同文）

天理本⑩

第二

扨其後、権のかみむねしげすでにくはらくにつき給へは、たくまの入道がんせきをはじめ都に有あふらうどう共、いづれも御前に相つむる時にむねしげ仰けるは、扨も此たび道すがらのなぐさみにたかがりして上る折ふし

（天理図書館本翻刻第一七六号）

東大本⑪

第二

権のかみむねしけすでにくわらくに付せ給へはたくまの入道かんせきを初め都に有あふ郎等共何れも御前に相つむる時に宗重仰けるは扨も此度道すからのなくさみにたかかりをさせて上るところに

大きく異なっているところは、平太郎の一子の名が天理本で「びよう丸」、東大本で「みどり丸」となっていること、および平太郎親子の道行文等である。東大本の方は、前述したように『古浄瑠璃の研究』にも紹介され、また『日本文学大辞典』の『祇園女御九重錦』の条にも詳しい解説がある。

では、この天理本『熊野権現開帳』はどういう正本であ

図版Web非公開

天理本（天理図書館交付のポジフィルムによる）

11・オ　　10・ウ

図版Web非公開

東大本（東京大学図書館交付の写真による）

7・オ　　6・ウ

るかを考えるに、表紙も元のままではなく、はじめ三丁、おわり二丁程度が欠けているため、手がかりは本文だけということになる。そこで、四段目にある平太郎親子の道行を見てみると、この道行は宇治加賀掾の段物集『大竹集』等に収められている「熊野権現　平太郎道行」と一致する。次に示してみよう。

天理本
『熊野権現開帳』
平太郎道行
三くまの丶、うらは
にあさるあま人の、
あみにはあらで引袖
の、かはきもやらぬ
つなてなはよりあは
せてもあをやぎの、
いとは物かはみたれ
ゆく、こゝろを、今
は、とりなをし人を
も我もなぐさめて
おやこはつなにすが
り付　（同）

『大竹集』⑫
「熊野権現
平太郎道行」
三くま野丶、浦は
にあさる海士人の、
網にはあらて引袖
の、かはきもやらぬ
つな手縄よりあは
せても青柳の、
糸は物かは乱
ゆく、心を今
は、とりなをし人を
も我も、なくさめて
おや子は綱にすが
り付

以上のことから、天理本『熊野権現開帳』は、宇治加賀掾の段物集で『熊野の開帳』あるいは『熊野権現』等と呼ばれている正本である、と判断できる。

さて、二本の『熊野権現開帳』のうち、天理本については加賀掾正本ということが確認できたわけであるが、加賀掾正本の刊行年、版元、あるいは東大本の所属太夫、刊行年、版元等は未詳のままである。が、前後関係だけは推測できる。すなわち、図で明らかなように天理本は版式において古態を留め、絵も東大本の方がはるかに洗練されている。また、全体を通して東大本は天理本よりも文が整っている。恐らく加賀掾本が早いであろう。今一つ、加賀掾正本における平太郎の子の名「びよう丸」は、加賀掾正本だけで消えてしまうが、東大本の方の名「みどり丸」は永く「平太郎が一子」の名として受け継がれてゆくのである。

以上のことから、加賀掾正本『熊野権現開帳』が、延宝期における平太郎伝浄瑠璃の最初である、と判断できるのである。この加賀掾正本は、延宝期における平太郎伝浄瑠璃の嚆矢と言うだけでなく、浄瑠璃における平太郎伝全体の流れの中にも、非常に重要な位置を占めている。やや煩わしくなるが次に概略を述べてみよう。

第一　三丁程度ナシ

親の仇を尋ねて諸国を廻る三浦平太郎は、仇が紀伊国の湯浅権守宗重の家臣となっていることを聞き、熊野権現へ四十八度の願をかけている、湯浅権守宗重は上洛の途中鷹狩ををするが。白鷺に放ち合せた秘蔵の鷹が柳の梢に足緒をからませる。柳の木を切ろうとするところへ平太郎が通りかかり、矢で足緒を射切る。平太郎はこの働きによって宗重に召抱えられる。湯浅と聞いて平太郎は喜ぶ。

第二　平太郎は宗重と共に上洛し、家臣と対面する。その時平太郎は、湯浅の家の弓の指南番たくまの入道がんせきと口論、得長寿院三十三間堂で弓の果し合いをする。その最中に、たくまの入道がんせきが実は尋ねる父の仇土井原刑部左衛門であることがわかり、平太郎は仇を討つ。

第三　平太郎はがんせきの門弟の追跡をさけて熊野に行き、前に自分が鷹の足緒を切った柳のところで若い女に助けられる。平太郎はこの女と契を交すこととなる。

そのころ都では後白河法皇の頭痛しきりであった。因幡堂の住職に薬師如来の御告があり、「後白河法皇は前生蓮花王坊という山伏であった。熊野権現に三山百度の願を立て、今一度にして慢心、天狗のために谷底に投げられ柳の木に貫かれて死んだ。が、九十九度まで参詣したその利益によって、今十善の帝王と出生された。しかし、蓮花王坊の体を貫いた柳に頭蓋骨が残っている。風が吹くと騒ぐので頭が痛いのである。その柳を切って都へ運び、廃れた霊地を復興し、千手観音を作って頭蓋骨を供養せよ」ということであった。法皇は奉行を湯浅権守に命じられた。

さて平太郎の方は穏やかに暮し、二人の間にはびよう丸という子がある。ある日女房は熊野詣をする平太郎にそれとなく別れを告げる。女房は柳の精であった。平太郎はひきとめるが、女房は法皇前生の頭蓋骨を渡し、別れを告げて消える。

第四　宗重は熊野へ来て柳を切り、引こうとするが動かない。そこへ平太郎とびよう丸が、頭蓋骨を持って都へ行こうと通りかかる。規子が柳にすがりつくと切口から血が流れる。宗重は親子に綱を引かせる。大木はらくらくと動いて七条河原に着く。宗重は院参し、次第を奏聞する。法皇は、得長寿院にならって蓮華王院を建立、平太郎は住持となる。御堂供養の日、柳の精は成仏する。

第五　法皇は、平太郎、びよう丸をつれて熊野権現に参詣、証誠殿にて通夜。平太郎に権現直の対面。（以下ナシ）

この『熊野権現開帳』は整った平太郎伝である。内容となっている平太郎伝は、それまでの平太郎伝と一線を画し

ている。それに伴い、『よこぞねの平太郎』で創造され、中途半端な形であった「平太郎平氏説」も、全体を統一する。また『よこぞねの平太郎』において全体の半分を費して語られた親鸞の事跡は、最大に見積って第五段の失われた部分、という程度に少くなる。『しんらんき』の場合と逆に、親鸞のかかわる平太郎の熊野参詣説話は、平太郎伝の中の一奇瑞説話の位置になったのである。これは、名実ともに平太郎伝浄瑠璃であり、さらに熊野から後白河法皇、蓮華王院建立と世界を広げ、これに配するに異種婚譚を以て作り上げたこの浄瑠璃こそ、「三十三間堂棟由来」の原型であり、かつ平太郎伝の流れを変えた作と言えよう。

ところで、今一つ延宝期に特異な平太郎伝浄瑠璃が存在する。延宝末年刊行と推定される所属太夫および版元未詳の『和合之名号』である。これは、平太郎およびその義弟平次郎をめぐるお家騒動であり、下巻に至って平太郎が親鸞の弟子となり大団円となる、というものである。『しんらんき』系統の平太郎伝でもなく、また『熊野権現開帳』系統の平太郎伝でもない。平太郎の前半生に焦点をあてた、孤立した平太郎伝である。従ってまた、その面からの検討も必要なのであるが、今はただその存在を指摘するに留めておく。

四　その後の平太郎伝

さて、加賀掾正本『熊野権現開帳』によって方向づけられた平太郎伝浄瑠璃は、その内容を充実させてゆく。元禄年間には『都三十三間堂棟由来』[13]を生み、さらに宝暦十年には、『三十三間堂平太郎縁起祇園女御九重錦』が上演された。この三段目「平太郎住家の段」が、「三十三間堂棟由来」の名で舞台生命を今に伝えている。

要するに、真宗道場の平太郎伝から出発し、真宗関係浄瑠璃中に親鸞伝と一体になって形成されてきた平太郎伝は、東本願寺のとった親鸞伝禁止という措置によって、親鸞伝カムフラージュのあおりをくった形で、言わば親鸞系に対する平太郎系とでも言うべき、一種専門化の道を歩んだのである。

この方向を最も推し進めたところに位する読本がある。親鸞も描かれず、真宗的な言葉もない。ただ、平太郎の仇討と後白河法皇の蓮華王院三十三間堂建立にまつわる怪奇な物語である。文化六年（一八〇九年）の刊行で、題して『卅三間堂棟材奇伝柳之糸』[14]という。言わば平太郎伝の終着と言えるであろう。

にもかかわらず、一方にはまた、真宗道場における平太

郎伝が、そのままの形で伝えられている。寛政八年には『平太郎事蹟談』が刊行され、文政五年（一八二二年）には信暁の著になる『平太郎之記』が世に送られている。特に後者は『伝絵』と、『伝絵』の作者覚如の長子存覚の手になる『諸神本懐集』を抜粋し、平太郎伝としたものである。

さらには、浄瑠璃における平太郎伝の展開に伴って、真宗道場における説教にも「三十三間堂棟由来」がテーマの一つとしてとり入れられることとなるが、この点については一応省略しておく。

むすび

以上、浄瑠璃における平太郎伝展開の概略を辿り、親鸞伝と一体であった平太郎伝が、東本願寺の親鸞伝禁止によってそれぞれ独立、分化し、専門化したことを述べた。

その分岐点にあるのは、外ならぬ宇治加賀掾の正本『熊野権現開帳』であった。外ならぬ、と言ったのは、実は加賀掾は親鸞伝においても同じ位置に位する『他力本願記』を上演しているからである。この背景にも大きな問題がある。この稿の不備と併せて課題としたい。

註

① 「『親鸞聖人御因縁』ならびに『秘伝抄』について」（『初期真宗の研究』所収）

② 前掲書所収摂津小浜豪摂寺蔵本による。

③ 『定本　西鶴全集　第七巻』による。

④ 滋賀県草津市南山田町　仏名寺、滋賀県守山市水保町　正覚寺等。

⑤ 太夫名・版元不詳。龍谷大谷蔵。『古浄瑠璃正本集　第一巻』による。

⑥ 版元は山本九兵衛。

⑦ 『古浄瑠璃正本集　第四巻』による。

⑧ 若月保治『古浄瑠璃の研究　第一巻』、横山　重『古浄瑠璃正本集　第一巻』等。

⑨ 「滋賀大国文」第十五号および第十六号の拙稿参照。

⑩ 天理図書館交付のポジフィルムによる。以下注せず。

⑪ 東大図書館交付の写真による。

⑫ 古典文庫刊『加賀掾段物集』による。

⑬ 伊藤出羽掾正本・平野屋七兵衛刊。後白河法皇五百年忌をあてこんだ元禄四年の上演かと思われる。

⑭ 五冊。歗酩陳人作、蹄斎北馬画。

○この稿をなすにあたり、天理図書館、東京大学図書館の御好意をいただいた。なお、大阪大学の信多純一先生、大阪市立大学の阪口弘之先生に貴重な資料を拝借し御教示をいただいた。記して御礼申し上げる。

（本学助手　国文学）